ハチとゾウ

バーバ・ムクターナンダが語った物語をもとに

昔、若くて強く、エネルギーがいっぱいのミツバチがいました。ハチは蜜を求めて花から花に飛ぶことが大好きでした。世界にはたくさんの花があり、それぞれ異なる魅力があります。小さなハチは、降り立った時に、足で花びらの感触を楽しみました。それから、花の真ん中へと入っていって、そこに隠された甘い蜜を味わいました。「フーン、フーン」と、ハチは花から花に飛び移りながら歌いました。「フーン、これはどんな味がするのかしら」。小さなハチは、一つの花に降りるとすぐに他の花に興味を引かれました。数日、ハチは時を忘れて蜜を味わう喜びにふけりました。

ある遅い午後、小さなハチは遠くの湖に着きました。湖の端には一面にハスの花があり、午後の日差しに美しい花をいっぱいに開いていました。小さなハチは、とりわけハスの花が大好きでした。一つの花の上に降り、その蜜を飲み始めました。別の花に移り、そしてまた他の花に移りました。ハチは蜜をたくさん飲んで、ふらふらになりました。

小さなハチは、巣に帰る時間だと分かりました。「ほんのもう一口」と、彼女はブンブンと音を立てて言いました。「すぐに帰るけど、その前に、もう一つだけ」

水際近くの木立で、心優しい賢人が立ち、湖の水面で戯れる夕日の光をじっと見詰めていました。彼は、ハスの中で一層のろのろと動き回る小さなハチに気づきました。

「ああ、小さなハチよ、時が過ぎていく」と、賢人は優しく言いました。「もうすぐ日が落ちる。家に向った方がよいのでは」

「そうですね」と、小さなハチは言いました。1分たっても、ハチはまだ動きません。ハスの花はとても柔らかく、その蜜はとても甘く ―― 立ち去ることがどうしてもできませんでした。「帰らなければ」と、ハチはブツブツ言いました。「すぐに」と、自分に言い聞かせました。しかし、もう一口、蜜を吸いました。

やがて、太陽の光が薄れ、ひんやりとした夜が訪れました。一面のハスは、夜に向けてその花びらを閉じ始めました。賢人は、とてもゆっくりと、自然に、小さなハチの周りの花びらが閉じるのを見ていました。太陽が地平線の下に沈み、日の光が落ちる頃には、一つのハスの花の中にとても小さなハチがいるとは誰も気づきませんでした。

小さなハチは、こんなふうに包み込まれても、のんきに構えていました。「心配しなくても大丈夫」と、ブンブンと音を立てて自分に言いました。「夜はすぐに明ける。朝になって太陽の光がハスに当たれば、花びらはまた開くでしょう。そうしたら飛び上がって、この蜜を全部巣に持って帰ろう。そして明日、仲間たちみんなを連れてきて、このハスのごちそうを楽しみましょう」

しかしながら、小さなハチがそう話すのは早過ぎました。その夜、若いゾウが、鼻を左右に揺らし、枝を折り、足元の枯葉をバリバリと踏みつけながら、暗い森をぶらぶらと歩いて来ました。湖の端に着き、暗く静かな水の上に一面のみずみずしいハスの花を見ました。ゾウはハチと同じくらいハスが大好きでした。ゾウは水の中に突進していって、ハスの花をむさぼり始めました。

深くハスの中に包まれて、ハチは恐怖で騒ぎ始めました。ゾウの顎が閉じた時、ハチは、巣に戻ることはもうないと、仲間を連れてきて蜜のごちそうを楽しむことはもうないと、知りました。ハチの命は尽きたのです。

翌朝の湖は、すべてが静かでした。夜の騒ぎを聞いた心優しい賢人は、森を通り抜けました。湖畔に着いた時、ハスの中で眠り込んだハチを見たことを思い出し、何が起こったのかを察しました。賢人は、胸に手を当てて頭を下げました。

「あなたに祝福を、かわいそうな小さなハチよ」と、彼は言いました。「あなたは快楽に魅了され、家に帰るのが遅れた。ハスがとても美しく、その香りはとても魅惑的で、蜜はとても甘いので、時をすっかり忘れてしまった。そのようなことは、ゾウがハスの花をむさぼるのと同じように私たちの日々をむさぼり食う。あなたの生と死に、私たち皆への教訓がある。今が、真理を知るために努力するべき時である」

改作: Jacqueline Murphy
挿画: Angela Steer

© 2018 SYDA Foundation®.著作権所有。